

すこし枯れた話

高橋義孝

すこし枯れた話

高橋義孝

講談社

すこし枯れた話

定価 11000円

一九八一年十二月二十日 第一刷発行

著者——高橋義孝

© Yoshihiko Takahashi 1981, Printed in Japan



発行者——加藤勝久 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目三三三 郵便番号二三

電話東京三九九一三二(大代表) 振替東京八一五〇

印刷所——慶昌堂印刷株式会社

製本所——大製株式会社

落丁本・乱丁本は、御面倒ですが、小社書籍製作部宛にお送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

〈著者紹介〉

高橋義孝(たかはし よしたか)——大正二年東京・神田に生まれる。昭和十年、東京大学文学部独文科を卒業。二年間のドイツ留学を経て、北海道大学、九州大学、名古屋大学各教授を歴任。現在、桐朋学園大学教授。昭和三十年『森鷗外』で読売文学賞、昭和五十五年NHK放送文化賞を受賞。現在、横綱審議委員長、NHK解説委員、東京都教育委員等を兼任。

近著

『ゲーテ・ファウスト集註』(都文堂)

『生々流轉』(TBSブリタニカ)

『大人のしつけ 紳士のやせがまん』

(新潮社)

『粹と野暮のあいだ』(PHP研究所)

『藝術と精神分析』(人文書院)

高橋義孝
すこし枯れた話
目次

I いのちの姿

大島紬の丹前 10

無題 12

三角点 15

片附かない気持 17

いのち三題 19

生々流転 22

死ぬまでは生きている 25

ある心境 29

II ア・ラ・カルト

下宿のおやじ 40

人づき合い 42

東京人の莫迦遠慮 45

- めぐりあい 47
- 「先生」列伝 50
- ウィンザー公の服 56
- 天皇 59
- 忘却のメカニズム 64
- 文房具を買う夢 66
- 日本語が好きである 69
- 学者の一条件 72
- しん気臭い話 74
- 教育は「負担」である 77
- 言葉の襖はだか的性格 79
- 品ということ 81
- わが幻の書齋 83
- 風変わりな愛読書論 88
- 稽古事の深い意味 91
- 春の味 97

ビールは陶器で 98

好味抄 99

夢の世の酒 100

うまくて安いという奇蹟 103

毀れた柱時計 106

ひとの禪 108

相撲界のディレムマ 110

相撲と葡萄酒 112

二子山親方 115

本と私 118

場違い 120

下限と上限 123

Ⅲ 芸術

「望郷」黒田清輝 128

歴史画の一問題 130

ピカソ——美と性と 133

文学の絵画化の問題 136

「芸術の起源」 138

芸術と死 144

二つの悲しみ 149

狂言について 155

日本の芸術の主観主義 155

美はどこから飛来するのか 158

六代目菊五郎の芸術観 161

私の一冊 167

IV 風土記——東京、九州、ベルリン

都心・神田界限 172

私のふるさと東京 173

隅田川 175

銀座とわたくし 179

九州の思い出 184

ドイツの文房具 187

半世紀 189

渺茫 西ベルリンの夜 192

後記 198

高橋義孝

すこし枯れた話

I

いのちの姿

I いのちの姿

大島紬の丹前

「大島の丹前を出してくれ」

家内にこう云って、細かい格子縞の大島紬の丹前を出させた。これは鹿兒島の大島を商う婦人から贈られたもので、丹前に仕立てたが、不断着るには一寸勿体ない気がして、いつも納い込んであって、あまり着たことがない。というのも、一冬に少くとも二着位の丹前を着潰す私がかれを着れば、たちまち膝のところの酒の染みや何かをつけてしまつて、すぐ駄目にしてしまふだろう。それまで着ていたのは木綿表の丹前だったが、見るも無惨によごれてしまった。その伝でこの大島の丹前もよほど用心して着ないと、すぐに染みだらけにしてしまふに違いない。そうかと云って折角丹前に仕立ててあるのに、着ずに納つて置くというのも妙なもので、この冬二番手の丹前として、春は近いがとにかく着ることにした。木綿と違って絹であるから着心地はいい。第一、着ていて軽い。それに柄が私の気に入っている。格子縞の大島紬は滅多にないだろうと思う。

今から二十年位前の話だが、福岡の日航待合室の一角に売店が並んでいた。現在の日航の建物ではなく、その一つ前の、昔の小さな建物である。私はまだ九大に籍を置いて、飛行機で東京と博多の間を往反していた。さてそこに大島紬を並べた小さな店があった。見ると黒の蚊紬の大島がある。家内に丁度いいと思ったが、金の持ち合わせがない。そこで思い切つてその店を取り仕切っている婦人に名刺を差し出して、次ぎに博多に来た時にお代をお払いするから、それでもいいかと尋ねた。私とおない歳か、あるいは少し歳下か、そんな年恰好の婦人は、

「どうぞお持ちになって下さい。お代はいつでもよろしうございます」と云つて反物を渡してくれた。

それから一年ばかりして、その婦人が不意に私の東京のうちを訪ねてきた。国許から大島を少々持ってきたので、見るだけでもいいから見はくれまいかというのである。その時、私を買ったかどうかは忘れたが、二、三知人を紹介して、少しは荷が捌けたようである。私は、この商売は永く続くまいと思つた。女手で持ち歩く反物の量は知れているし、広い東京でつてを求めてという商いのやり方にも限度があろう。むしろそんなことは口に出さずに、この婦人がうちへ来れば、私として出来るかぎりのことはして上げた。

I いのちの姿

そのお礼か、ある時、例の格子縞の変り大島を一反、私にくれるというのである。悦んで頂戴した。またある夏は麻で織った男物の夏帯を持ってきてくれた。

昭和四十五年、私は九州大学を辞任して東京に帰ってきた。もっと勤めていたかったが、いつまでも東京九州の二重生活は続けられまいと思ったからでもある。あれ以来今年でもう十一年の歳月が流れすぎた。しかし、控え目で品のいい、例の大島紬の婦人はふっつりと姿を見せなくなってしまった。こうして大島の丹前を着ていると、自然とあの人はどうしているだろうかと思う。

無題

今年九十歳になる一人から手紙を貰った。今では友人知人の大半があゝの世に行ってしまった自分はひとり淋しい日々を送り迎えているが、人間、あまり永生きするの
も考えものだとその人は書いている。まさに白楽天の詩の心境だろう。

往事ハ渺茫トシテ都ベテ夢ニ似タリ

舊遊零落シテ半バ泉ニ帰ス

醉悲シテ涙ヲ灑グ春杯ノ裏

吟苦シテ頤ヲ支フ晝燭ノ前

「零落」は「死ぬこと」である。そう云えば、私の周囲からも、あの人この人と、幾人かの友人知人が姿を消して行つた。相撲場の私の定席は行司の真うしろである。右隣の常連は新橋にある料亭の主人で、大柄な人である。左隣にはいつも築地の魚河岸の大きな問屋の旦那が坐る。ところがこのふたりとももう黄泉の客となつてしまつた。そのほか毎場所必ず土俵下の席に顔を見せていた常連でふつりと足の杜絶えてしまつた人も何人かいる。さあこんどはいよいよ己の番かと思わずにはいられない。何年か以前、シンガポールへ向つて旅立つ長女一家を羽田空港に送つたことがある。ふたりの孫のうち、下の娘はまだ赤ん坊であつた。飛行機が滑走路を離れて空中に舞い上り、旋回して西の空へ豆粒のように飛び去って行くのを見送りながら、あの豆粒のような飛行機の中には、孫たちがさらに小さい豆粒のように乗っているのだと思ふと妙な気持がした。機影を見送る私の老母は涙を流していた。無理もない、もう歳であるから、再びあの可愛い曾孫たちに会う折はないかも知れないと思つたのであ

I いのちの姿

ろう。さてその老母も他界して既に何年かが流れ過ぎた。長女一家はその後東京に帰ってきたが、今は再び日本を去ってアメリカにいる。アメリカへ出発する時には一家を羽田空港に見送ったが、涙こそ流さなかったが私はまさに往年の老母の立場にあった。相撲場から姿を消して行った人たちのことを考えると、不思議と羽田空港に曾孫たちを見送った老母の姿が念頭に浮ぶのである。

朝々花ハ遷り落チ

歳々人ハ移リ改マル（寒山）

毎日々々花は移ろい落ち、毎年々々人は移ろい死す、という意味であろう。支那の詩人には人生の無常、流転を歌った秀句が多い。

今年の夏もたった一日であったが、外房の家へ行った。この海岸とのつき合いは既に半世紀の余に及んでいる。この土地でもすべてが変りに変わってしまった。「およそ近世の文学に現れた荒廃の詩情を味はうとしたら埃及伊太利に赴かずとも現在の東京を歩むほど無残にも傷ましい思をさせる處はあるまい。今日見て過ぎた寺の門、昨日休んだ路傍の大樹も此次再び来る時には必ず貸家か製造場になつて居るに違ひないと